



〈38〉

福村 俊治

あの風景はどこに

二十世紀の沖縄は、「破壊と建設」の世紀であった。亜熱帯島しよ地域という自然条件よ

と日本・中国の中間に位置する地域の条件を生かしてできた街並みや建物を沖縄戦ですべて失った。そして戦後、米軍基地間の残地に、たった五十数年という

冷戦終結後、世界は大きな変革の時代に入っている。日本もその中であつて新しい展望を見つけられず、経済の停滞化、進まない行政改革、高齢化など何ひとつ明るい話はない。街や建築も同じである。日本のどの地方都市も戦後の経済成長の中で自然を壊しながら都市化し、行政主導で東京追隨の画一的な街や建築物をつくってきた。

一方、ヨーロッパの大都市はその歴史を体現する形で社会資本としての街や建物をつくってきた。経済成長の激しい中国の都市も人口の集中や都市の拡大

に伴うさまざまな問題に対して積極的な政策を打ち出し、都市周辺のインフラ整備と既存市街地の大改造を行っている。土地はすべて国有地だから、すべての計画が早く、安く、実現でき、どの都市もこの十年で信じられない程様変わりし、活気ある近代都市に生まれ変わりがつある。世界の多くの都市で、生き残りをかけて「都市の再生」が試みられている。

誇れる沖縄を残す

市民レベルで始める都市再生



▲米軍施設内に残る大木。もはや本島内で以前の地形と自然をとどめるのは基地内だけなのだろうか
▼青い海に囲まれた沖縄県。海岸線でさえ、コンクリートの護岸へと姿を変えてしまった



あつた緑豊かで広大な丘陵地の米軍施設も返還後は、コンクリートの建物群で埋めつくされつつある。返還前にあつた広い芝生の丘陵地と巨大なガジュマルの木々はいったいどうなったのだろうか。沖縄の経済的繁栄と街づくりは沖縄のもつとも貴重な自然を失うという犠牲の産物だったのだろうか。

さて、沖縄に住むわたしたちは今後どうすべきなのか。街づくりや建築づくりは、どこにでも通用し、こうすればうまくいくという「答え」はない。無数の解答があり、地域や住民に合ったよりよき答えを求め、行政や計画の専門家とともに、住民一人ひとりの意向と協力と議論に基づいて生み出す共同作業であることを忘れてはならない。

現在も貴重な自然をとり崩す形で街づくりが進行している。他方、



那覇市泊(上)と天久新都市(下)。経済的繁栄の名の下にコンクリート建築群で埋め尽くされた市街地

(おわり)
(チーム・ドリーム代表)